

# 乳幼児期の低出生体重児の発達と母子支援に関する 臨床心理学的研究

中島, 俊思

<https://doi.org/10.15017/1654971>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 論文博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	中 島 俊 思			
論 文 名	乳幼児期の低出生体重児の発達と母子支援に関する臨床心理学的研究			
論文調査委員	主 査	九州大学基幹教育院	教授	福留留美
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	遠矢浩一
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	田中真理
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	松崎佳子（他専攻）

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、乳幼児期の低出生体重児の社会的発達の特徴を明らかにし、母子の育ちへの臨床心理学な支援技法を検討することを目的とした。第1章では、低出生体重児の乳幼児期から学童期までの発達傾向に関する従来の研究知見を概観し、本邦における低出生体重児のフォローアップ体制の充実と母子支援の必要性について指摘した。第2章では、18～20か月時点における社会性の発達について、共同注意行動や気質の特徴から検討し、“視線追随”や“物の提示”など共同注意行動のいくつかの領域で苦手さがあるとともに、成長に伴ってキャッチアップする領域もあることが明らかになった。第3章では、就園前の3歳児健診における社会性の発達と、就園後の保育園における発達プロセスを検証した。36か月の低出生体重児は、“会話の持続”や“言葉の獲得”で低い一方で、“指さし”のような行動は獲得していることが明らかになった。就園後の保育園生活における発達プロセスの検証では、“粗大・微細運動”“身辺自立”などで年少から年長へと学年があがるにつれ、標準体重児群との差異が解消されていくが、“落ち着き”や“注意力”といった領域では、差が残存する傾向が明らかになった。第4章では、産褥期においてNICU入院を体験した母親の主観的体験と養育行動に関する検討を行った。産後1か月時点において抑うつ傾向に差異はなく、NICU群は自己不全感が有意に低かった。子どもへの愛着意識では、“親しくしたいと思う”“抱くのが楽しい”といった接近欲求は高い一方で、“私を必要としている”“赤ちゃんの人格がわかる”といった項目でNICU群の低さがみられた。第5章では、第4章の母親を対象にした半構造化面接の臨床心理学的な支援技法としての利点と限界を踏まえて、就園前の低出生体重児とその母親を対象にしたサポートグループプログラムの開発と効果測定をおこなった。効果として抑うつ傾向や外傷体験様の症状の低下、一部の養育スタイルの改善がみられた。以上の結果を踏まえ、第6章では総括として、乳幼児期における低出生体重児の発達プロセスと各領域への介入の有用性について考察するとともに、母親への臨床心理学的支援技法および母子をとりまく地域中心型リハビリテーションの枠組みの活用について述べた。

以上のように、本研究は、乳幼児期の低出生体重児の発達プロセスについてさまざまな領域からその特徴を捉え、母親の育児に関する主観的な体験と養育行動を検討した上で、それらの知見を、母子を対象としたサポートグループプログラムの開発と地域における実践として展開している点で、研究および臨床実践の両面で意義深い成果を示した。

よって、本論文は、博士（心理学）の学位に値するものと認める。